

笹川平和財団 羽生次郎会長：

笹川平和財団の羽生でございます。

本日は当財団で新たに設立いたしました笹川中東イスラム基金、この記念講演会に日ごろから当財団がお世話になっているたくさんの方のご参加をいただきまして誠にありがとうございます。特に大変お忙しいスケジュールの中でこの講演会の記念講演を行っていただく小池百合子先生、本当にお忙しい中お越しいただきありがとうございます。また、この基金の設立準備、あるいはこの運営のことについて色々とお知恵を拝借した中東イスラム諸国の大使閣下、また外交団の皆様、それからこの基金の設立にあたって大変なご支援をいただいた日本財団の皆様、この機会を借りて心より御礼申し上げます。

私どものこの笹川中東イスラム基金は、日本と中東との間の相互理解と、それから人的交流の促進を目指すものでございます。ご存じのように、日本と中東イスラム諸国は、大変友好的な関係でございます。過去もそうでしたし、現在もそうでございます。しかし、その友好を確固なものとする基盤となる相互理解の努力であるとか、或いは人と人との交流となりますと、かなり限定的な規模でしかなくないのではないかと、私どもは認識いたしました。まず、日本の我々にとっては中東イスラム諸国の政治、経済、文化、歴史といったものを知る必要があるでしょうし、知る機会を作る必要があると思います。また逆に、中東の方々にとっては日本の同様な事情をご承知いただく機会を作っていく必要があると、このように考えて我々の基金を設立した次第でございます。

これからこの基金の運営については、ここにいらっしゃる皆様方のお知恵を拝借しながら、またご支援を得ながら実施していくことになるわけですが、特にできて間もないところでは、まず日本においては中東の情勢を、中東においては日本の情勢をそれぞれの国語で紹介すると、言葉で紹介すると、このような事業に手をつけたらいかかと考えておりますし、また若者たちの交流、それからオピニオンリーダーたちの交流、こういったものも考えて参りたいと思います。いずれにいたしましても、私たちの基金とその運営というのは、非常に長い中東と日本との交流の歴史での最初の小さい一歩でございますが、是非この事業を拡大し、そして深めて、大きく育ててまいりたいと考えております。そのためにはここにいらっしゃる皆様のご支援とご協力とが不可欠でございますので、この機会を利用いたしまして皆様方のご支援とご協力を重ねてお願いいたします。このお願いをもって私の開会の挨拶といたします。本日はありがとうございます。

衆議院議員 小池百合子氏：

皆様こんにちは。只今ご紹介を賜りました衆議院議員小池百合子でございます。まずは笹川中東イスラム基金の設立、誠におめでとうございます。日本と中東の関係がこの基金を通じてさらに深まり、広がることを心から期待をいたしております。お聞きのように、今日の講演は日本語で行います。英語はチャンネル 2 でございます。アラビア語ではいたしません。

今日はちょうどカタールの皇太子殿下がお越しで、先ほども多くの中東諸国の大使の皆様方と一緒にさせていただきました。時間を活用してコミュニケーションを図る中で、「今年のラマダンは何月何日からか」が話題となりました。今年は 8 月の 20 日からのようようですね。今年の総理官邸でのラマダン明けの朝食会の準備のために必要な情報なのです。夕方なのに朝食会、本当の意味の「ブレック・ファースト」、イフタールの準備です。ここにおられる中東諸国、特にイスラム諸国の大使の皆様方はこの数年間、日本の総理官邸でイフタールに参加していただいております。イフタールとは、1 ヶ月続くラマダン中、太陽が明るいうちは断食をしますが、夕方、日没後にお食事をいただく習慣があります。そのイフタールを総理官邸で行うイベントを数年前から始めましたこの習慣について、もっと日本でも知ってもらいたいと考えそれをよりよく知らせるためにはまずトップから始めるのがよかろうと、当時の小泉総理にお願いしました。イスラムにはこういう風習があります、こういう文化がありますとご説明しました。フランスのエリゼ宮や、ホワイトハウスなど、各国の官邸で行っているように、是非とも日本でも始めるべきであるとアドバイスさせていただきました。当時の小泉総理は快くそれを受け入れて下さり、官邸でのイフタールが始まったわけでございます。官邸の主はしょっちゅう変わりますけれども、この官邸で行うイフタールのイベントは不変です。日程は毎年 15 日ずつ早く行われますけれども、この官邸でのイフタールは絶対に変わることがないように願っております。

さて、先日は、私はヨルダンに参りました。現在国会の超党派の議員による日本パレスチナ友好議員連盟の会長をこの 1 月から仰せつかっており、この 2 月にもパレスチナのガザ地区とヨルダンを訪問したばかりです。ガザの空爆の直後、いえ、まだその最中でありましたけれども、現地に参りました。現状をこの眼で見て、それを日本の多くの皆さんにお伝えをする、中でも議員の方々にお伝えをすることが重要と考えました。それによって我が国が何をすべきかを明確にしていく、そのために、ガザ及びヨルダンを訪問したばかりでした。

今回のヨルダン訪問は死海で行われました世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議に出席するためでした。ダボス会議は中東で行われることがしばしばございます。今回は死海において行われたこの会議には日本から参加した議員は私だけでございました。この中東におけるダボス会議に必ず招かれるのは、私とあと数人の方でございましょうか。国会の開会中でありまして、また費用は自分持ちなので、結構大変なのでございますが、ここは行くべきだと自分で判断をして、参加をしてまいりました。いくつもワークショップやプレナリー会議が開かれますが、その中で、非公式の会議がございました。私も約 15 人のメンバーの中の 1 人としてその会議に参加をしてまいりました。会議の参加者は、アラブ連盟のアムル・ムーサ事務局長、そしてまたハーシミー・イラク副大統領、私の愛すべき友人でありますバーレーンの外務大臣等々、中東における主な方々が多くそこには参加されておりました。アメリカからは大統領候補でありましたジョン・ケリー上院議員も参加をしておりました。考えてみれば、私も元総裁候補であったなあと思い出すわけでありましてけれども (笑)、そういったメンバーでこの会議が行われたところでございます。

その中でいろんな議題がございました。イラクの復興について、また残念なことに自爆テロなどが各地で発生する文化的な背景、教育的な背景はいかに、といったような課題も出てまいりました。メディアの在り方はどうすべきか、も話題になりました。

私の方からは、この点を申し上げておきました。それは、アラブの諸国は地域が異なりますと、アラビア語も少しずつ異なるように、文化もそれぞれが微妙に異なります。お互いに誇りを持っています。ときにはライバル心もございます。そういう中で、例えば開発が著しい湾岸諸国は、その豊かな富を背景に大変な開発ラッシュが起こっている。それは皆さんもご承知のとおりでございます。昨年のリーマンショック以来、若干そのスピードが遅くなったとも言われていますが、それは一時のことでしょう。またこれからもその開発は続くことでありましょう。そして、お互いにお隣の国、お隣の首長国のビルよりも 1 メートルでも高い建物を建てたいと、建物の高さを競い合ったりしています。海岸線の開発、港湾開発にも競争があります。航空会社もアラブ首長国連邦の中でもドバイのエミレーツ航空に続いて、アブダビの、イッティハド航空ができました。このようにアラブ諸国は常に競い合いながら、ダイナミックに動いております。

中東、アラブ諸国での開発競争が目覚ましいものがありますが、私が懸念することは、原子力発電の建設を各国が競い合うように進めているということです。UAE、サウジアラビアも、それからカタール、バーレーンも、エジプトも。大変な原子力発電の開発競争が起こっているのです。

日本のように資源のない国は、平和利用としての原子力発電に頼るところが大きいわけであります。私は環境大臣を務めました。安全の確保を大前提としながら私は日本のような国は原子力発電を安全に運転していくことは、我が国のエネルギーの活用という点でも極めて重要であると、思っております。中越沖地震以来しばらく停止しておりました柏崎刈羽原発が運転再開いたしますが、多分 CO2 の排出量で言うならば 2%近い意味合いがあります。CO2 の排出は 9%程度増加しておりますが、原子力発電所の運転停止分を、石油、石炭の火力で代替していたわけで、全体では大体 3~4%分が寄与してきたと考えられます。そこで、今回の原子力発電の再開で、願わくは 2%分は減少するであろうと期待するわけでございます。

中東には、資源の豊富な産油国、産ガス国などが多いわけですが、それらの国々が原子力発電に大変な関心、興味を抱いています。そして極めて早いスピードでその準備を行っております。一方で、イランの核開発の問題がございます。それからイスラエルの核保有は、ダブルスタンダードだとの指摘もしばしばされるところです。アラブ諸国、湾岸諸国を含めて原子力発電の開発が行われることに、私たちはノーと言う権利はございません。また日本の平和的で、且つ安全性には定評のある日本の原子力発電技術が湾岸諸国をはじめとする産油国、アラブ産油国に展開されるのは意義があります。また地球温暖化の観点からも意味のあることです。原子力発電の活用でアラブ産油国、産ガス国の持てる資源をより有効に、人類のためにより長く、より有効に使うという点でも極めて意味のあるところでしょう。

一方で、今申し上げましたように、核の問題については、国際的な査察を拒否したり、もしくはそれらを阻む、透明性に欠けるケースも多々ございます。東アジア地域でいうならば、その最たるものが北朝鮮であります。今回も核実験を行ったと発表いたしました。国際社会から、そういった国々に対しては明確な意思表示をしなくてはならないと思います。

そこで先ほどの死海におけるダボス会議での私の発言ですが、第一に、4月5日にプラハにおいて、オバマ・アメリカ大統領が初めて、唯一核を使った国の

道義的責任に言及をしたこと、第二に東アジアにおいて北朝鮮のように無謀な核実験を行う国があること、第三にイランやイスラエルの核の問題は、中東地域のみならず、世界に対しての大きな国際的な影響があるということ、第四に今後、原子力発電が世界各地で広がるということは、安全性の確保、平和利用の徹底を必ず進めていかなければならない指摘しました。ましてや、技術開発、イノベーションによって核の保有がより軽量で、そして小さくなっていくとすれば、テロリズムに核が加わるということは今後の世界の安定を阻害し、極めて危険な話になってくるわけでありませう。

そこで私の提案は、例えばアラブ連盟で、IAEA のアラブ版を創設する。それによって透明性を確保する。むしろ世界から指摘をされる前にアラブ側が先にそれを提唱したらどうかと。ましてや、IAEA 事務局長はエジプトのエルバラダイ大使です。ところで、次期事務局長には、どうぞ日本の候補者に投票していただくことを期待いたします。こちらにおいでの大使の皆様には、その点をお願いしておきます。原子力の平和利用に最も敏感で、そして安全な運転に定評のある我が国の候補者が今エルバラダイ事務局長の後の後継として出馬しておりますので、是非ともサポートしていただきたい。と同時に、エルバラダイ事務局長はもともとエジプトの外交官ですが、彼はその分野のプロフェッショナルです。彼を是非ともアラブ連盟などの組織のもとに置いて、アラブ各国での今後の原子力発電の安全性の確保のための、組織体を作る。そして世界に向かってそのことを公表していく。私はアラブ諸国の原発ラッシュに対しての、国際的な懸念を払拭すると思ひ、提唱させていただきました。

アラブ連盟のアムル・ムーサ事務局長も、それは非常に有益な考え方だと述べておられました。この提案を例えばアメリカや他の国が言うのと、日本が発言をするのでは、私は意味合いが違うと思うんですね。日本と中東の関係を論じる際に、重要なことは、私は日本からどのようなメッセージを中東に対して出すことが最も中東地域の各国にプラスになり、且つそれが日本の持てる力をさらに伸ばすことができるか否か、ウィンウィンの発想が重要です。そのためにも、まずは日本自身の力の棚卸をすべきだと思います。日本の持てる力の棚卸をしていく中で、最も有効なのは、今申し上げた原子力発電などを含めた被爆国としての経験をどのようにして中東地域でポジティブに生かしていくか、というのが 1 点。

それからもうひとつは、やはり日本の持つ環境力を活かすことです。これは元環境大臣としても申し上げますけれども、日本の環境力は有効です。これは

単に地球温暖化対策としての太陽光発電、太陽電池といったものだけではなく、地球温暖化のみならず、日本が GCC などの国々や、中東諸国とともに行ってきた水の技術も含まれます。あれは何の会議体でしたか。野上義二大使が担当してらした会議です。環境分野の会議で、特に中東で一番必要なのは水の問題であることは、明確です。日本の持つ浄水の技術、そしてまた考え方そのものです。ね、この環境力を中東に提供するのは中東にとって意味がありますし、日本にとってもより意味がある。私はいつも申し上げております。20 世紀は CO₂ をどんどん排出した世紀。21 世紀は CO₂ の排出を抑えると同時に、もう一つの新たな、いえ、新しくても最も古い問題、つまり H₂O の問題が再び浮上してくるであろうと、申し上げております。よって環境力、日本の持てる環境の力は地球温暖化対策だけでなく、水、大気汚染、ごみ処理、こういった総合的な環境力を活用すべきだと。

もうひとつの力が教育であります。先ほども羽生会長もおっしゃいました。若い人たちとの交流を進めていくことがイスラム基金の活かし方一つであると。先ほどカタールの皇太子とお会いし、私からお話をさせていただきました。今、非常にアラブ諸国で盛んであり、お互いに競争をしている分野が教育でございます。たとえばジョージタウン大学のカタール校ができました。テキサス大学もございます。それからソルボンヌ大学など各国の主要な大学が今中東諸国に進出している。エジプトでも新しい大学院大学で、日本の技術力を学んでもらうべく、イー・ジャスト (E-JUST) という形で進めているわけがございます。

ただ、そういった高等教育の段階も重要でありますけれども、やはり中東の地域で日本が教育面で最も日本としてのメッセージが出しやすい、出すことができるのは、むしろ初等教育の部分ではないだろうかと思っております。ご承知のように、既にアラブ各国で日本の「公文」が盛んに広がりを見せています。公文式の数学、算数です。これが広がりを見せている。それからこの中の大使の皆様方も、武道館でご覧になったと思っておりますけれども、「鈴木メソッド」という、バイオリンの練習のコンセプトがございます。このように、私は小さい子供のころからの、日本の、何て言うんでしょうか、道徳観や計算の仕方などを日本が伝えていくのは意味がある。初等教育は人間教育の一番基礎でございます。この部分で日本の力を中東諸国とシェアしていくのは、イスラムの宗教とは反するところはないと思っております。むしろ、日本の心も学んでいただければ、中東諸国の発展にも大きく活かせる。良い果実が 20 年後 30 年後に人材として、各国における人材として、それぞれの国にとっては最大の、最高の宝となることでしょう。日本の心を知る子供たちが大きく育っていく、そんな姿を私は今

後見たい、夢のように思うわけでございます。

このように、中東と日本の関係の強化は、幾つもチャンネルがございます。しかしながら、あれもこれもというよりは、日本からのメッセージが伝わる工夫も是非この笹川中東イスラム基金で進めていただきたいと期待しております。また少ない知識ではございますが、私の工夫なども活かしていただければ嬉しく思うところでございます。

日本の教育について、最後に触れさせていただきました。私はカイロ大学留学のため、最初にエジプトに参りましたのは 71 年でございます。カイロ大学の学生数は、その当時でもう既に 7 万人、8 万人近い規模でありました。ですからカイロ大学の試験のときは大変です。いつもは大学に出こない学生も、試験になったらさすがに出てまいります。ということで、教室などでは机が足りず、グラウンドや庭の部分など屋外の部分にまでテントを張って、試験を受けたことを覚えております。時には野良犬が私の足元にきて、クンクンと鳴くこともありました。とにかくカイロ大学、大変な大きな大学だったわけでありませぬ。最近では分校ができたということで、学生数の数え方が違うかもしれませんが、私が数年前にカイロ大学の百周年のお祝いに参りましたときは、カイロ大学の全校生数は 25 万人だと伺い、驚きました。

日本は少子化が大きな問題になっているわけでございますが、アラブの多くの国々ではこのように人口が爆発している。もしくは、外国人の労働者を、景気後退などで変化した際に、どのようにして待遇を変えていくのかなども大きな問題です。それから、今回ガザ地区で見参りましたように、ガザは爆撃など不幸なことが重なっておりますけれども、食糧がない、ガソリンがないと、ないものばかりでございますが、人口だけは確実に増えております。今回のイスラエルでの総選挙で、ウルトラ右派と言いましょか、強硬派で知られるリーベルマン氏に取り上げた公約ではイスラエルにおける有権者からアラブ系を除外するようなニュアンスの政策を訴えていたと記憶しております。今、イスラエル国内で生まれる 4 人のうち 1 人が非ユダヤ人ということでございます。そういったことを考えますと、人口問題への対応が、実は一番肝心なところでしょう。また、はるか昔、旧約聖書よりも前の時代を振り返りますと、イスラエルからの民は多産過ぎて、エジプトのファラオは頭を悩ませました。そして男の子の、間引きをしたと伝えられています。モーゼは、籠に乗ってぷかぷかと流されているところを拾われたとも伝えられています。これらの大昔の社会状況を考えますと、結局人口問題に起因する動きだったわけでありませぬ。私は

環境大臣を務めまして、結局のところは人口問題が最大の地球温暖化の鍵の根源であると痛感したものです。またどのようにして化石燃料を人類共通の宝として、有効裡に活用していくのか、この知恵こそが、石油がないからこそこの日本で編み出せる大きな技術だと確認したところでございます。

日本の学校は寺子屋に始まりました。読み、書き、そろばんでありました。一方で、アラブ、中東、イスラムの学校は、もともとはコーランを暗唱し、暗記したものを歌うようにして覚えていくことから、マドラサが始まったわけでございます。私は日本の読み、書き、そろばんの寺子屋と、そしてコーランを歌うところから始まって、コーランの心を学ぶマドラサ、学校教育には、私はどこかで必ず接点があると思っております。その接点作りを、笹川中東イスラム基金が是非とも強力に推し進める原動力となってくださることを心から期待申し上げ、私の基調講演とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(了)